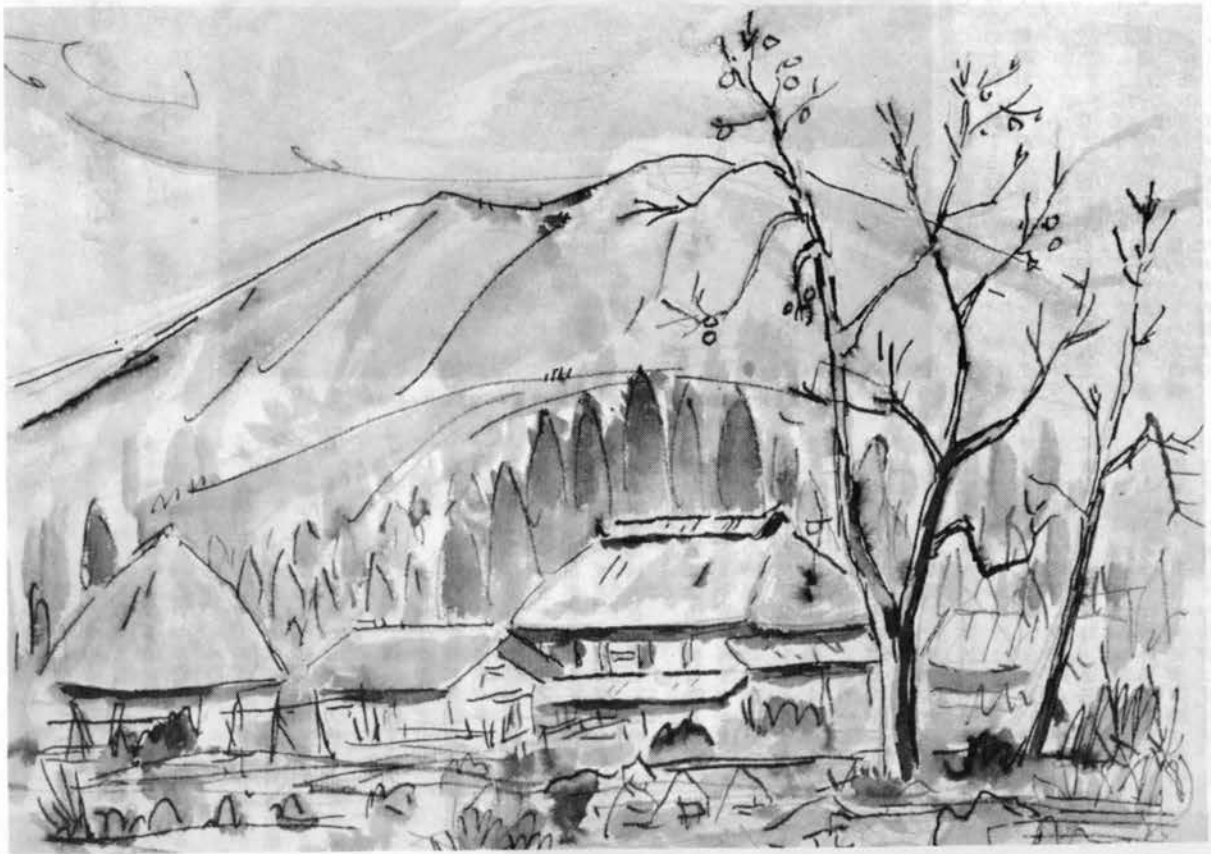


山と博物館

第20巻 策11号 1975年11月25日 大町山岳博物館



北ア山麓の秋

画 齊 藤 清

漬物今昔

最近面白い話を聞いた。オートメ化された漬物工場に信州産の大根を満載したトラックが到着すると、ただちに大根はベルコンに乗って水洗場へ、水洗された大根は一晚塩漬にされると、今度は乾燥機の中をくぐらされる。水々しかった大根はしわしわの大根に変わり更に人工着色・合成保存料の液の中を泳ぎ、コンブやコヌカや調味料の中を通り抜けるのできりである。見た目には3カ月も4ヶ月も漬け込まれたような顔つきになるのに3日とはかからないそうで、コヌカなどのカスをつけたままポリ袋の中に収められるのである。今、北アルプス山麓では漬物用の野沢菜や大根洗の真最中である。

今年は異状乾燥で野沢菜や大根のデキが悪く値段の方も昨年の倍近いということ、そのためか例年より漬けこむ量も少なめにしたという話も聞く。

信州の代名詞のようにさえなっている野沢菜漬も各家庭によってそれぞれ味が違う。

それは塩以外に野沢菜や大根の味をよくするために一緒に漬け込む調味料が異なるからで、それぞれの家庭の持味をだすことに主婦は腕をふるうのである。

その味は、おばあちゃんから受けつがれたものであり、又、自分で工夫したものであったりする。今漬け込まれたものは長い冬の間中食べられる。合成保存料などは添加してないから、暖かくなる春先にはすっぱくなる。

ごく自然のなりゆきと私たちは思ってきた。漬物とは、糠味噌などに漬けてならした食品(広辞苑)なのである。付着させたものではない。近頃のインスタント漬物の味の単一化されていることと、いつまでたってもすっぱくならない奇妙さ、それは、生きた味を失なった漬物に他ならない。

私は野沢菜や大根漬は各家庭の持味を失ってしまいたくないと思うと同時に、春先にはすっぱくなる漬物を信州の味と知ってほしい。

樹木と害虫 (2)

各種害虫の見分けかたと防除

小沢 孝弘

昆虫類は専門的というと動物学上節足動物門昆虫綱に属し、その種類数は地球上の動物の約四分の三を占め、その数は百万種以上といわれている。そしてこれらの昆虫は自然界では生物相を構成する一員として、それぞれの役割をはたしているが、いわゆる害虫として人間に直接影響をあたえているものはそれほど多くはない。

さらに樹木の害虫だけをしぼるとその数はかなり限られたものとなるが、それでもなお数多くの種類があり、その一つ一つの種名を覚えることはなかなか大変である。

単に害虫を防除するだけであれば、一つ一つの害虫名を知らなくても、食害時に薬剤散布をすれば、それで一時おさえにはなるが、これではどうしても不十分である。

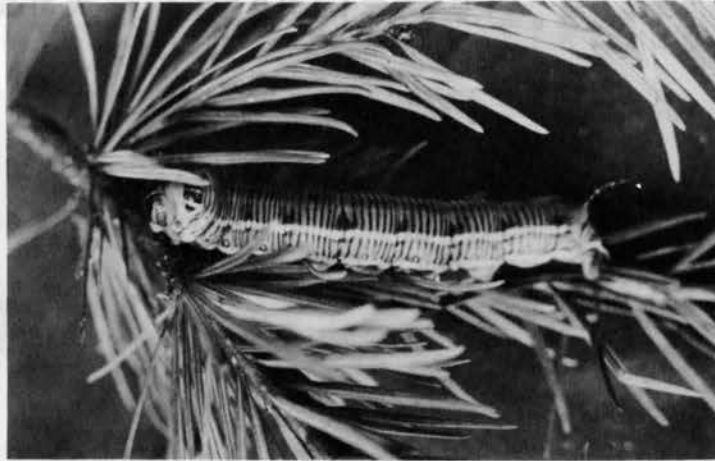
したがって今回は森林にはどのような昆虫(害虫)が生棲しているか、そしてその害虫はどのようにして見分けるか、またいかにしたら防げるかについて二・三の解説をおこなうこととした。

森林害虫の見分けかた

森林害虫は大きく分けると七目に分類される、これらは加害する樹木の部分と加害方法によって、比較的容易に見分けることができる。

一、害虫の分類

昆虫綱は二十四の目にわけられているが、このなかで樹木(こ)では木材加工製品も含



(葉を食べる害虫) カラマツ針葉を食害するマツクロスズメの幼虫

む)に対して直接、間接に有害な昆虫は、大體次の七目に属する種類である。

1、鞘翅目

コガネムシ、ハムシ、キクイムシ、ゾウムシ、カミキリムシなど一般に甲虫類といわれているもの。

2、鱗翅目

蝶や蛾のなかまでであるが、害虫としては大型のカレハガの類から小型のハマキガの類まで、

3、膜翅目

ハバチ、キバチ、タマバチなどのハチのなかまで、この目では天敵類としての寄生蜂も多い。

4、半翅目

アブラムシ類、カイガラムシ類といった樹液などを吸収する害虫。

5、双翅目

タマバエ、ガガンボなどのハエのなかまで、この目には天敵類としての寄生蠅も多い。

6、等翅目

建築材などに大害をあたえるシロアリの類。

7、直翅目

苗畑で稚苗を害するエンマコオロギ、ケラなど。

二、加害方法による見分けかた

害虫の種類を判定する手がかりは、加害されている木の種類および加害の方法である。そしてその加害の方法によって食葉性(葉を食べるもの)・吸取性(樹液や葉液を口器によって吸うもの)・穿孔性(材などに穿孔して材の内部を食害するもの)・虫層形成(芽や葉に潜入して養分をとり虫コブをつくるもの)・根部食害(土中で根を食害するもの)に大別され、これらを解りやすく分けると次のようになる。

1、葉

- 葉を食べる：ケムシ(蛾の幼虫)、シャクトリムシ、ミノムシなど(含む)ハムシ、ハバチ、コガネムシ
- 葉にもぐる：ハモグリガ、タマバエ、フシダニ

- 葉をつぶる：ハマキガ、メイガ(蛾の幼虫)オトシブミ
- 葉をちららせる：アブラムシ
- 葉から樹液を吸う：アブラムシ、カイガラムシ、ハダニ、グンバイムシ

2、若枝と芽

- 若枝、芽をかじる：コガネムシ、ハバチ
- 若枝(新梢)にもぐる：シンクイムシ(メイガ、ヒメハマキガなどの蛾の幼虫)キクイムシ
- 芽にもぐる：メムシガ(蛾の幼虫)、タマバエ、タマバチ

3、幹と太枝

- 幹、枝にもぐる：キクイムシ、カミキリムシ、ゾウムシ、キバチ、コウモリガ、ボクトウガ、スカシバガ
- 幹、枝から樹液を吸う：アブラムシ、カイガラムシ

4、種子と実

- 種子にもぐる：タネバチ、タネバエ
- 球果にもぐる：シンクイムシ、メイガ(蛾の幼虫)
- 果実にもぐる：シンクイムシ(蛾の幼虫)ゾウムシ

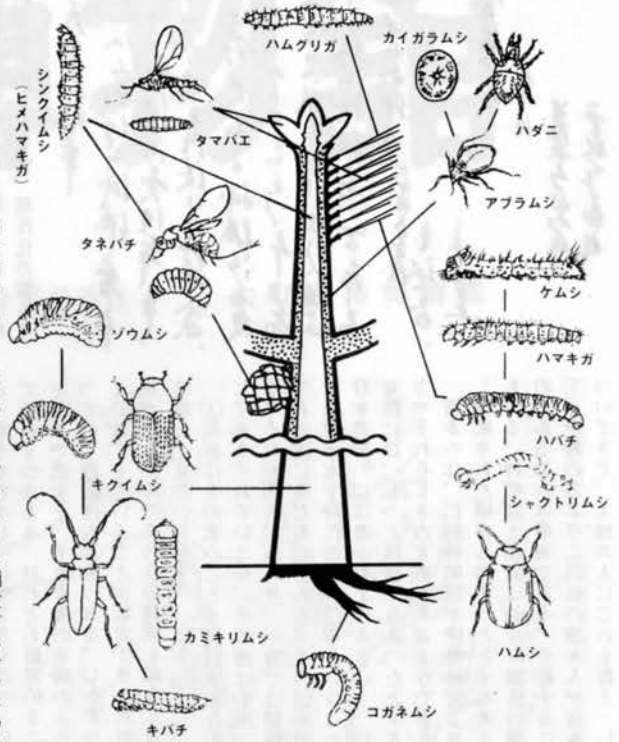
5、根

- 根をかじる：コガネムシ、ヨトウムシ
- 根から樹液を吸う：ワタムシ
- 太根にもぐる：キクイムシ、カミキリムシ

〔注〕虫の名前は種名ではなく大づかみなグループ名である。

害虫を見分けようとする場合、以上述べたようにたとえ種名がわからなくてもグループ名(できれば少しくわしく科名まで)がわかれば比較的容易である。一般に昆虫は、卵、幼虫、さなぎ、成虫の

樹木の各部分につく害虫



四段階を経過するのが普通であるが、樹木(植物)を加害するのは、幼虫期によるものが多い。しかし加害が目によれやすい幼虫については、図鑑には書かれていない場合が多いので(成虫が主体)どういう名前の虫なのか見分けるのが困難である。

そこで参考までに一部の幼虫を主体とした図を書いてみたので参考にしていただければ幸いである。

防除の方法

一、天敵の利用

樹木に害虫がついたら直ちに薬をかければよいと考えがちであるが、殺虫剤は残留毒性の問題、あるいは薬害があるので、薬剤を使わずに駆除できればそれにこしたことはない。それで最近、天敵を害虫の防除に用いようという考えかたが脚光をあげ、すでにマツケムシなどに有効であるウイリスを増殖して、林地に散布したり、カイガラムシに寄生する

ハチやカイガラムシを捕食するテントウムシを大量に放したりして大成功を収めた例もある。

しかし天敵を利用する防除法は、自然界のバランスを念頭において実施しなければならぬ。たとえば害虫の駆除に野鳥を利用しようとする場合には、害虫を捕食する鳥が来やすいように単純林をやめて混合林をつくつていくとか、害虫の寄生蜂を利用しようとする時は、寄生バチの活動する時期には殺虫剤を使用しないようにするとかいったことが、天敵の利用につながる防除法である。

殺虫剤の種類や適用害虫については、次回にいろいろの害虫のなかでふれるので、ここでは主に使用する場合の注意事項について述べる。

毒性のつよい農業は法律によって、つよい順に特定毒物、毒物、劇物にわけて指定され

二、殺虫剤

ており、これ以外の農業は普通物とよばれている。このうち特定毒物は強い制限があり、林木に対して実質上使用しないし、一般的には劇物が普通物を使用する。例をあげれば、普通物にはスミチオン、マラソン、劇物にはデイブテレックス、毒物にはE.P.N、特定毒物にはパラチオンなどがある。

なお以上の他、農業には魚毒性の問題があり、実際に散布する場合、川や池などの魚介類に対する毒性を考えなければならぬ。影響のありそうな場所では、川や池に直接入らないような配慮が必要である。

また農業を実際に散布する場合、害虫の食害のしかたによって防除法がかなりちがうし、薬剤の効きかたもちがってくるので、専門家に聞くなり配慮も必要である。

次に植物に対する薬害は、条件によっても異なるが、一般的には次のようなことに注意する必要がある。

- 1 規定量以上まきすぎないこと
- 2 新芽の開葉時には高濃度のものを散布しないこと
- 3 高温のときは薬害が生じやすいので、朝夕のすずしい時をえらぶこと

などがあげられる。

対象となる樹種

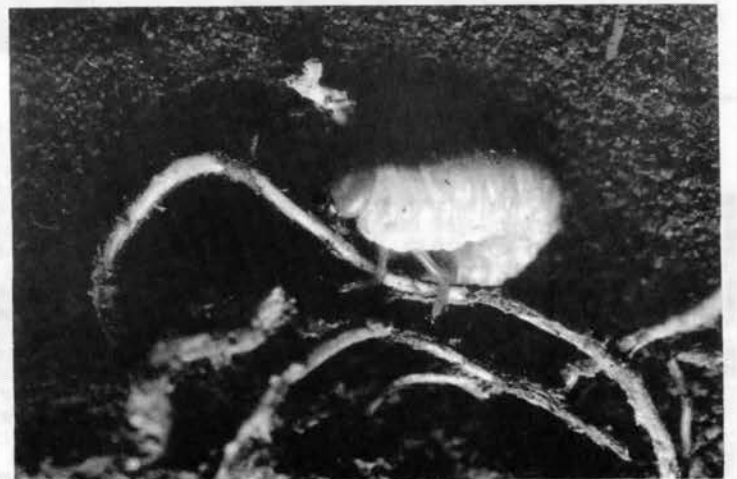
森林で害虫の発生が多いのは、マツ類、カラマツ、トウヒ類、モミ類と一部の広葉樹などであり、スギ、ヒノキの害虫は比較的少ない。

マツ類は食葉性、虫癭形成害虫、新梢に入る小蛾類、芽や球果を加害する小蛾類、枝や幹に穿孔加害する穿孔虫類(一般的にマツクイムシという)など害虫の種類もきわめて多い。

カラマツは、ハバチ類、小蛾類(ハマキガ

のほかマイマイガ(雑食性)コガネムシ類(オオスジコガネ、スジコガネ、ピロッドコガネ)などの食葉性害虫の被害をうけやすい。トウヒやモミ類は、幼令期にアブラムシ類の被害をうけやすく、林地でもツガカレハ、ハマキガ類などの食葉性害虫の被害も多い。また広葉樹ではポプラ類、ハンノキ、ケヤキなどが、穿孔性害虫(コウモリガ類、ゴマダラカミキリなど)をはじめ、ハマキガ類などの食葉性害虫の被害をうけやすい。

以上述べたいくつかの害虫については、次回稿を改めて解説することにする。



根をかじる害虫! ヒノキの根を食害するオオスジコガネの幼虫

(農林省
林業試験場木曾分場)

宮本・松崎和紙の歩み (1)

臼井 潤

昭和五十年度大町市文化祭が例年のように十一月菊花展とともに開幕され、伝統あるこの行事にメイン展示物として、郷土の誇りとして幾百年の伝統ある宮本・松崎和紙を展示して、市民のみならずに見ていただくことになった。これを展示するにあたっては、教育委員会の東奔西走のお骨折りによる、行なわれることになった。和紙漉の道具を中心に、これらの和紙が、いつどのようにして、この地に始まり、今日に至ったかについて提示し、また、この仕事にたずさわった人々の歩んだ道をふりかえり、思いを新たにしたいと願ってのものである。

器具・材料については、大町市立社小学校紙漉資料室のものを、また、現代化の製品を

紙漉の道具を中心に、これらの和紙が、いつどのようにして、この地に始まり、今日に至ったかについて提示し、また、この仕事にたずさわった人々の歩んだ道をふりかえり、思いを新たにしたいと願ってのものである。

宝暦四年
享保廿年
天明四年
天保十一年
文政二年
天保十一年
天保十一年

の他は、松崎の腰原製紙所さんに提供していただいたものである。

① 松崎・宮本紙のおこり

社を中心にして栄えた、和紙漉を考えると、宮本・松崎だけを極地的にながめても、その全貌を知ることにはできない。したがって全日本的な、政治・経済・産業などのかかわりの中から見る必要があると思う。結論からいうと、どうしてこの地に紙漉がはじまったか、そしてそれはいつからか、ということについては、はっきり断定できるものはないと言ふことである。けれども、いくつつかの説、想像の域を出ないが、多分こうだろうとか、むりなむすびつけをしたものなどについてはいくつつかある。けれども断定的なことをどこかで出すと、それが次の定説のようになっていく危険性も多分にある。したがってここでは、そういうことが断定できるだけの証拠が乏しいのでそれらの諸説を紹介しながら考察して見たいと思う。

① 和紙はその名のごとく純日本的なものとして考えられているが、その源は中国にはじまりそれが西方に伝わり、一方では朝鮮を経てわが国にきたものとある。その伝来が日本では聖徳太子時代の六一〇年ということに「日本書紀」には書かれているという。しかし実際には、もっと以前からあったとする考え方やそれらしき古文書もあるようである。

宮本へは、仁科神明宮が伊勢神宮より分祀し祭祀された頃から始まったとする考えの人もある。神明宮と和紙は昔から関係の深いものであることは事実である。分祀するに当たって、伊勢の方よりこの紙の漉き人が宮本までついてきて、土地の人にこれを教えていった

とも、またこちらから分祀に際して、習い覚えてきたものとも考えられるとしている。幸いにも東山一帯に原料たる楮やのりの原料としての楡が自給自足出来るくらいは自生していたという。

宮本紙はかくして、神明宮とむすびつけてその起源とする考え方は、人情としては理解できるが、根拠とするものがないのでかくも上代まで遡ることができるとどうか私にはわからない。

② 紙漉のことが、いろいろな古文書の中にはつきり出てくるのは、江戸時代である。その中から拾って見ると

享保廿年
大町組館之内村紙漉御改書上帳
卯の四月晦日 是指上扣也
庄や 又八
組頭 作左衛門

一紙漉 又八・弥衛門
御役銀八歩

是ハ先年藤九郎と申者、御役上納仕紙漉申候得共不勝手故漉道具等譲り申二付、右兩人御役上納仕、作間ニ少々宛志帳紙漉申候
一紙漉 作左衛門・喜左衛門
御役銀八歩

先祖作兵衛と申者、御役上納仕紙漉申候、それより段々々宛作間ニ志帳紙漉申候、右之外、紙漉老人も無御座候、若此と右之家業仕度者御座候ハ御申可申上候、以上。

大町組 館之内村
庄や 又八
組頭 作左衛門

享保廿年
卯四月
曾根原庄左衛門殿
栗林五郎右衛門殿
館之内伊藤繁隆氏所蔵の文書であるが、こ



其二

れだけを見ても、紙漉をするために、株を持つている者が御役銀として、営業税的なもの、権利的なものを含めて行なっていることがわかる。実際には社地区としては、作間にほとんどの家がやるようになったと考えられる。今で言えば、出稼やアルバイトといったものになるわけである。江戸時代の文書に表われたこれらの紙漉に関する記事は、いろいろな形のものが残っており、相当に盛に行なわれていたことは、まちがいない。

社からは、小杉紙という形で納めたり、原料の楮で納めるといった形があり、いずれも松川の紙庄屋を経て、松本庄内組清水へ納めたものなどが、文書面には出ている。江戸時代にとどめて、どのくらい、何軒くらいの家でやっていたかということにははつきりわかってはいない。

(大町市文化財調査員・美麻南小学校)

山と博物館第20巻第11号
一九七五年十月二十五日発行
発行所 長野県大町市T.E.L.O.二二一
大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町
大栄タイムス印刷部
定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野一三、二九三)